

豚の分娩管理(その5) —分娩前後の疾患2—

開業獣医師
山本 輝次

4.便秘症

豚の便秘症は、他の動物に比べて多い疾病です。大部分は大腸便秘ですが、稀に小腸便秘も見られます。便秘は、腸の弛緩や腸の蠕動運動の低下によって腸の内容物が腸管内に停滞すると、排糞が遅れます。この結果、糞が秘結(糞が硬くなること)して、排糞がまったく認められなくなります。

1) 原因

- (1) 環境の急変やストレスは、本病が発生する誘因となります。
- (2) 老齢や飼料の急変、過食および繊維不足の飼料の給与は本病が発生する大きな原因となります。
- (3) 熱性疾患(熱射病や産褥熱、豚丹毒、オーエスキー病、アクチノバチラス病等の呼吸器疾患)や中毒(南天中毒や食塩中毒など)は副交感神経が障害されるために、排糞反射が抑制されることによって便秘になります。
- (4) 妊娠末期になると、妊娠子宮に腸管が圧迫されるため、便秘になることが多くなります。
- (5) 放牧場や広い豚房で自由に運動していた母豚をストールや分娩舎に移動すると、運動不足から便秘の原因となります。特に初産分娩豚で多発傾向にあります。
- (6) 飲水不足や飼料不足は、消化機能や腸蠕動が減退するため便秘の原因となります。
- (7) 脚弱や腰痠は本病を併発します。
- (8) 腸閉塞や腸捻転、腸重積および直腸の狭窄は便秘症の原因となります。

2) 症状

元気・活力は消失し、食欲は不振または廃絶します。さらに、排糞量は少なく秘結します。また、腹部を圧迫すると硬く、膨満感があり疼痛を訴えます。体温は平熱か若干低体温となります。しかし、夏季に便秘になると腸管内の異常発酵と熱の放散ができなくなり、呼吸速迫と自家中毒を起こし体温は上昇します。

3) 予防および治療

i: 予防

- (1) 粗繊維に富んだ良質の飼料を給与してください。
- (2) 水は自由飲水させ、ブッシャーやウォーターカップを定期的に点検してください。
- (3) ストールや分娩舎に長時間閉じ込めておくと、運動不足から便秘になりやすいので、排泄した糞を観察して秘結するようであれば、時々分娩舎やストールから出して運動させてください。

ii: 治療

- (1) 塩酸メトクロプラミド(プリンペラン)を10mlかメチル硫酸ネオスチグミン5mlを筋肉注射してください。
- (2) 微温湯3~4ℓの石鹼水かグリセリンを使って浣腸をしてください(妊娠豚や分娩末期の母豚は流産や早産の原因となります)。
- (3) 整腸剤や硫酸マグネシウムおよび人工カルルス塩などの塩類下剤の強制経口投与も効果があります。

5.脚弱(腰痠、腰抜け)

この項では、起立困難、起立不能、開脚姿勢(股裂き)、跛行(ビッコを引く)するような豚を脚弱(腰痠)として扱います。

脚弱の発生は、大型種のランドレースや大ヨークや、これらの大型種同士の交配によるF1(LW、WL)を母豚に供用するようになってから、増加する傾向にあります。また、休息豚房飼いやなどの集約的に飼養管理する方式になってから増加する傾向にあります。このため、繁殖障害(不受胎豚や流産、早産など)とともに分娩率や分娩回転数が低下する大きな原因となっています。

1) 原因

病因的には、非炎症性の骨軟骨症と骨関節症および炎症性の関節炎(ブドウ球菌やレンサ球菌、大腸菌、パストレラ菌、マイコプラズマ、アクチノマイセス・ピオゲネスおよび豚丹毒などの感染)などを総称して脚弱として取り扱われています。骨軟骨症は関節の軟骨と骨端軟骨の病変(退行性、変性)を主徴とする疾病です。骨関節症は主に関節軟骨に病変が見られる疾病です。また、先天的や後天的(豚舎環境や飼養管理)な誘因として、

(1) 先天的に直趾(繋ぎが硬い)や骨量不足や後躯の切れ込みが強く、臀筋部の外張りとの内張りが激しい豚や、胴伸びのありすぎる豚は脚弱になり易い傾向にあります。

(2) 特に、繁殖母豚は過肥にすると四肢に過度の負担がかかるので、脚弱の原因となります。

(3) ストール飼いは、運動不足となりやすくなります。また、分娩豚房では長時間一定の姿勢を保たなければならないので、本症が多発する原因となります。

(4) ビタミン・ミネラルの不足(ビタミンDとカルシウム、リン)は本症が発症する原因となっています。

(5) ストールや分娩舎の床の傾斜が強い場合も、本症の発生誘因となっています。

2) 症状

本症は、起立時に両前肢の前膝屈折(両膝が屈曲がしている)、後肢の場合は、犬座、開脚姿勢(股開き)、直飛(飛節が硬い)などの諸症状が認められます。また、起立時に左右後肢が震戦し、ストールの柵を滑り止めにして起立する場合は、本症の初期症状です。さらに、両臀筋部を床にべったりつけ強制的に起立を試みても、両前肢が前方に滑走して、起立できないようであれば本症が疑われます。

歩行時に腰を振って歩く(モンローウォーク)豚や、交配時に雄が乗駕した時に後躯から崩屈するような豚も、脚弱の初期的な症状です。

3) 診断

野外で簡単に診断する方法として、次のようなことが挙げられます。

(1) 尾を持って強制的に起立を試みると、左右後肢のどちらか一方か両後肢ともに、負重(踏足)不能の豚や、前方に滑走姿勢を呈する場合は重度の脚弱です。

(2) 起立しても、四肢の左右の柵に後肢を踏ん張り、辛うじて起立するようであれば脚弱の初期症状が疑われます。

(3) 歩行させると跛行や開脚姿勢を呈するようであれば本症が疑われます。

(4) 歩行時に、歩幅が狭く蹄尖で歩くような母豚は、脚弱になる傾向があります。

(5) 両前肢の前膝部に挫傷や胼胝(角質化)ができており、屈曲して突球姿勢を呈するような症状は、起立困難や歩行異常の豚に見られます。

(6) 健常豚は、後躯を軽く叩くと直ちに起きます。

(7) 歩様は歩幅が広く軽やかに歩き、足関節や繋ぎが柔らかく、趾底の着地面積が広く、左右の趾が開いているような母豚は四肢が強健です。

4) 予防

- (1) 四肢が柔らかく強健性のある豚を選抜してください。
- (2) 母豚候補豚を選抜する場合は、後躯の腿が著しく張っていないものを選んでください(腿の外張り内張りが著しく張っていないもの)。
- (3) 背線が水平かやや若干反り気味の豚を選抜し、背彎姿勢を呈しているような豚は避けるようにしてください。
- (4) 繁殖豚は、育成中や離乳後は広い豚房で十分運動させることが大切です。
- (5) 育成中や妊娠中、産前・産後など全期間を通じて、ビタミン(A・D・E)やミネラル(カルシウム・リンなど)の給与することが重要です。
- (6) 母豚候補豚は、育成中は制限給餌を行い徐々に体型を作ることが肝要です。
- (7) 分娩舎やストールの床の傾斜は、長さ2m前後で3~5度以内か平坦にすることが大切です。

5) 治療

発症初期に、ステロイドホルモンやカルシウム剤、ビタミンDおよび鎮痛解熱薬(注射薬や外用薬を含む)などの投与は効果が見られることがあります。

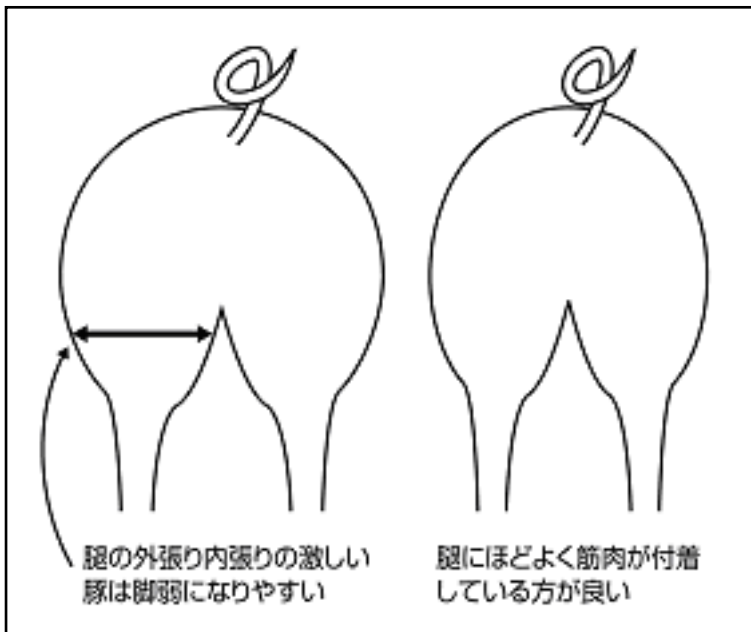


図1 後躯から見た腿の張り度合

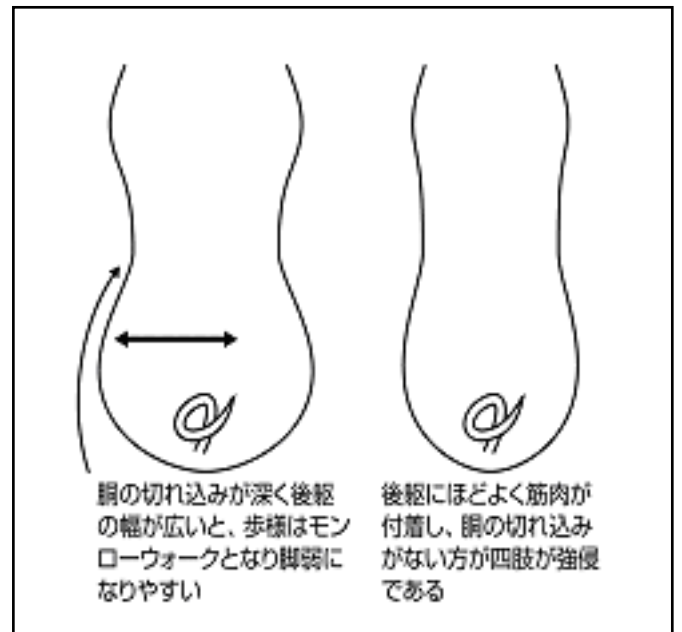


図2 背面から見た腿の張り度合